

2021年7月6日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 前田 菜摘
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 教師の成長および学校の教育改善を両全する校内研修モデルの開発のための基礎研究
論文題目（英文） A basic research project to develop the model of *Kounai-kenshu* that can support both teachers' growth and school improvement

公開審査会

実施年月日・時間 2021年6月18日・13:00-14:30
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第一会議室
オンラインシステム（ZOOM）の併用

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	尾澤 重知	博士（知識科学）	北陸先端科学技術 大学院大学	教育工学
副査	早稲田大学・教授	井上 典之	Ph. D (Educational Psychology)	Columbia University	教育心理学
副査	早稲田大学・教授	保崎 則雄	Ph. D (Educational Communication)	The Ohio State University	教育工学
副査	早稲田大学・教授	浅田 匡	修士（学術）	大阪大学	教育工学
副査	学習院大学・教授	秋田 喜代美	博士（教育学）	東京大学	教育心理学

論文審査委員会は、前田菜摘氏による博士学位論文「教師の成長および学校の教育改善を両全する校内研修モデルの開発のための基礎研究」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について約35分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 質問：この研究で提示されているモデルによって各学校の校内研修のあり方を実際に評価・診断し問題点を特定するためには、追加でどのようなデータ収集が必要だと思われるか。

回答：本研究におけるモデルは、仮説検証によって客観的に診断を行うことではなく、認識枠組みとして提示することによって学校や教師が自己の状況を理解することを目的としている。さらに変数を増やしていくアプローチではなく、研究者自身が実践現場に入り、ともに模索していくような形の研究についても検討していきたいと考えている。

- 1.2 質問：実際の学校における教師の学びはさらに複雑な形で起こると思われるが、その複雑性をどこまでモデルに含めていくべきか。例えば学校組織の中で想定される教師の学びには学年団での授業についての交流やインフォーマルな同僚関係によるものまで含まれると考えられるが、そうした構造を捉えるためには、このモデルをどのように修正すべきか。

回答：従来の校内研修や授業研究の研究は、省察や協働に焦点化されてきた。今回提示したモデルの意義は、校内研修における研究主題というものの重要性を示した点にある。現段階のモデルでは、組織構造といったものは全て、個別の教師が認識する文脈に含まれている。しかし、客観的に観察可能な組織構造は明らかに存在しており、こういった要素をモデルに含めることは今後の課題である。

- 1.3 質問：校内研修の理想的な状態というのはどういうものか。

回答：その学校独自の成果を作っていくことが、これからの学校教育において課題になると考えている。例えば、カリキュラムマネジメントによる学校を基盤としたカリキュラムはその1つである。校内研修を通じてカリキュラムを絶えず見直していくことによって、教員が異動しても学校システムの中に継続性のある成果を残すことができると考えている。

- 1.4 質問：校内研修の研究主題に着目しているが、主題の設定過程といった学校の文脈の記述が不十分ではないか。

回答：主題設定の過程は多様であると思われるが、一方多くの学校では校長をはじめトップダウンで研究主題が設定されていると捉えている。したがって、本研究では研究主題というものがすでに存在する状況の中で個別の教師がどのように学んでいるかという点から研究してきた。今後の研究では、研修をマネジメントする側の視点から研究をしていく中で、研究主題の設定といった点についても課題としていきたい。

- 1.5 質問：第5章の研究で、事後検討会ではなく事前検討会の場面を対象としているのはなぜか。

回答：事前検討会での協議は、省察や学習の場としてではなく、教師集団が共同的に授業を計画する中で、組織のもつ知が現れるのではないかと考え、その組織の持つ知の変化を分析した。事後検討会には校外の指導者の参加があったということもあり、今回の分析では校内の教師のみで行われた事前検討会を対象とした。

- 1.6 コメント：それぞれの学校が独自性をもって校内研修に取り組んでいる。今後複数の学校に入る中で学校のダイナミズムがより見えてくるのではないか。また、研究主題の設定過程や、学校と個人の間にある組織構造といった点を踏まえて研究を位置付けることによって、今後さらに発展していけるのではないか。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

- 2.1.1 今後の研究課題について、本研究の意義と限界点を明確にした上で加筆修正すること。
- 2.1.2 「省察的実践家」と「反省的実践家」の表記の混在があるため、統一すること。
- 2.1.3 英文題目について、より適切な表現を検討すること。

2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

- 2.2.1 「7章 研究の総括」のうち「7.4. 本研究の課題と今後の展望」について、本研究の成果が校内研修研究の中でどのように位置付いているかを明示し、限界点を踏まえた今後の研究課題について加筆した。
- 2.2.2 「反省的実践家」について、全て「省察的実践家」に表記を統一した。
- 2.2.3 英文題目について論文審査委員の指導を受け、“A basic research for developing the model of *Kounai-kenshu* which supports both teachers’ growth and school improvement” から “A basic research project to develop the model of *Kounai-kenshu* that can support both teachers’ growth and school improvement” に修正した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文では、日本の校内研修が十分な理論的バックグラウンドを有してこなかったことを取り上げ、その理論体系を築く必要性を主張している。校内研修における学習モデルの構築を目指す本論文の目的は、校内研修の形骸化の問題を解決する上で明確かつ妥当であると判断できる。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文の各研究は、校内研修の営みを探索的に検討する上で明確に構成されている。各章を構成する研究は、それぞれの研究目的とデータの特性に応じた分析アプローチが用いられており、その妥当性が明示されている。なお、本論文で実施した研究の手続きについては、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を取得し（2017-028）、調査の前には参加者に対して調査内容についての十分な説明を行い、インフォームドコンセントが得られた上で実施したとしており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、先行研究から校内研修の仮説モデルを提案し、それに基づいて研究を行うことによって、校内研修の意義と課題を整理している。その結果、校内研修が学校レベルの研究活動と個別の教師の日常的な省察の両全の往還の中で機能していること、また、仮説モデルを用いることによって形骸化の問題の一端が記述しうるということについて述べられている。以上の

知見は、これまでに理念レベルで示されてきた校内研修の機能をデータから実証的に説明するものであり、明確かつ妥当なものである。

3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1 これまで、校内研修は1時間の授業研究を単位とした個別の教師の学習の場として検討されてきた。本論文は、日本の校内研修が研究主題という共同的な研究活動として機能していることに着目しており、そのことが個別の教師の学習と相互にかかわっていることについてデータを用いて検討した点において独創的であると判断される。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 校内研修は、授業実践に基づいた共同的な議論が個別の教師の学習に果たす機能の点から主に評価されてきた。本論文の知見は、日本の校内研修が学校の課題に則した研究主題をもつ点から、学校の教育改善と個別の教師の成長が一体化している機能を実証的に説明した点において、学術的に意義があると考えられる。

3.5.2 本論文では、学校現場において問題となっている校内研修の形骸化の問題について、提案されているモデルを用いることで2つのパターンによって説明している。このことは、校内研修の課題を記述する一助となるものであり、教育現場に対する貢献が期待されるものと考えられる。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1 「人の学び」を探求することは、人間科学における重要なテーマの1つである。本論文では、教師文化がもつ学びのシステムである校内研修を切り口として専門職が組織の仕事の中で学ぶことについての新しい知見が提示されており、人間科学に貢献していると言える。

3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- ・前田菜摘，浅田匡（2019）学校研究としての校内研修の若手教師の変容に対する機能教師学研究，22(1)：13-23
- ・前田菜摘，浅田匡（2020）小中学校教師は校内研修をどのように捉えているか 尺度項目ならびに比喻生成課題の回答から 日本教育工学会論文誌，43(4)：447-456

- ・前田菜摘, 浅田匡 (2021) 教師を育てる校内研修. 浅田匡, 河村美穂 (編) 梶田叡一, 浅田匡, 古川治 (監) 人間教育の探求 5 : 教師の学習と成長. ミネルヴァ書房, 京都, 141-158

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上